

## ヨハネによる福音書 4章 16～26節

前回、私たちは、「イエスとサマリアの女」の前半部分の全体（4：1～26）から 聖書の語りかけを聴きました。サマリアの女性の隠された心の動きを探りつつそうしたわけですが、しかし彼女はイエスの語りかけの本意が分からず、ピントの外れた言葉を返します。そのとき、イエスは彼女の内面を見据え、心の深みを突く問いを発せられました。「あなたの夫をここに呼んで来なさい」（16）と。今月の対話はここから始まり、その核心へと深められていきます。

### 中心テーマ

- ・24 節に イエスの返答として「神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない」と述べられていますが、今月の対話の中心はここにあると言えるでしょう。
- ・これに先立つ 23 節でも、「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって 父を礼拝する時が来る」と言われています。
- ・そして、イエスは言われます。「今がその時である」（同）と。
- ・イエスはこうして、礼拝に向かう者の姿勢について語り、礼拝の本質について教えられます。
- ・しかも、それが最後には、「キリストと呼ばれるメシアはこのわたしである」（26）との自己表明にまで至ります。どうやら、極めて重要な事柄が語られているようです。

### サマリアの女：「わたしには 夫はいません」（17）

イエス：「あなたには五人の夫がいたが、今 連れ添っているのは夫ではない」（18）

- ・二人の対話はこのやり取りから、その深みへと進んでゆきます。
- ・サマリアの女性はすでに5人の男と結婚し、今は6人目と<sup>どうせい</sup>同棲しています。
- ・当時、モーセの律法では、夫のほうからは妻を離婚できても、その逆は認められていませんでした。それからすると、彼女は5回も夫に離縁されたこととなります。
- ・もちろん、例外や抜け道はありました。
  - ①女性のほうから裁判所に請願を行ない、裁判官がそれを妥当と認めた場合には、裁判所の権限で夫に離婚を命じることもあった。
  - ②女性が資産家の場合、夫にお金を払い、夫から離婚の申し出をさせることもあった。
- ・とはいえ、いずれにせよ、離婚の回数は多くても3回というのが当時のしきたりでした。サマリアの女性はそれを超え、しかも今や結婚すらせずに、男と一緒にいます。
- ・彼女の心はどんなだったのでしょうか？ 何が彼女をそんな人生に追い込んだのでしょうか。彼女はいったい、何を求めていたのか。そして、それははたして、この私たちと無縁なことなのか。サマリアの女性の内面に、心を<sup>ひ</sup>惹かれます。

「わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが・・・」(20)

・自身の身边をめぐるやり取りを通じ、サマリアの女性はイエスの中に尋常でないものを感じ取ったのでしょう。彼女は話を礼拝の事柄に変え、次のように言います。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが・・・」(19~20)。

・「この山で」とは、サマリア地方の中心に位置する「ゲリジム山」のことです(聖書地図参照:『新共同訳聖書』付録「聖書地図6 新約時代のパレスチナ」等)。



・人種と信仰の純潔性をめぐってユダヤとサマリアの間に歴史的な反目があったことは、前回触れたとおりです。それが礼拝の場所をめぐる対立ともなり、サマリア人はゲリジム山に自分たちの神殿を建設しました。それは、聖書をかなり強引に読み込み、時に意図的に読み替えることすらして、「我々のゲリジム山こそ、最も聖なる、最も祝福された場所だ」としたことから来ていました。

・「(この山で) 礼拝しましたが」というのは、こうして建設したゲリジム山の神殿での礼拝のことです。神殿はユダヤによってすでに破壊されていましたが、しかし礼拝は引き続き行なわれていました。

・当然ながら、それはユダヤ人が礼拝を献<sup>ささ</sup>げてきたエルサレム神殿でのそれと相いれないものとなりました。

・ゲリジム山は、サマリアの女性が水を汲みに来ていた「ヤコブの井戸」(1:6。シカルの郊外約1kmに位置)の近く、見上げると目に入るところに立っています。

・とすれば、サマリアの女性は水を汲みにきては独り、ゲリジム山を仰ぎ見ていたのではないのでしょうか。彼女はそこで、何に目をやり、何を想い、そして何を祈り求めていたのだろうか。そう思わされてなりません。

「あなたがたは知らないものを礼拝しているが・・・」(22)

・そんなサマリアの女性に、イエスは言われました。「あなたがたは知らないものを礼拝しているが、

わたしたちは知っているものを礼拝している」

・実のところ、サマリア人は、

①旧約聖書の最初の 5 書、すなわち「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」だけを自分たちの聖書とし、それ以外は除いてしまっていました。

②箇所によっては、言葉を書き換えているところもありました。

・彼らはなぜ、聖書をそんなふうにしたのでしょうか。その動機ははたして、何なのか？ そして、そうした作為から生じる結果とはいったい、どんなことか？

・それより何より、聖書を読むとはそもそも、どのようにしてそうすることなのでしょう。

・しかも、サマリア人の信仰はその根っこにおいて、神に対する恐れと無知とに基づいていた、とも言われます。

・つまり、サマリア地方がアッシリア帝国に征服され、異国の民が侵入してきたとき、彼らは自分たちの神々を携えてきました。その彼らと—前回 触れたように—サマリアの人々との雑婚が始まり、そのなかで サマリア独特の宗教が形成されていきます。しかし それは、「現地の神を取り除いたら、どんな祟りがあるか分からない」という、侵入してきた異国の民の恐怖心から維持されたものでもありました。

・イエスがサマリアの女性に「(あなたがたは) 知らないものを礼拝している」と言われたのは、サマリアの信仰をめぐる 以上のような背景から来ていました。

・こうした歴史の事実から、私たちはいったい、何を学ぶように求められているのでしょうか。聖書のどんな読み方に陥らないよう、また信仰のどんな在り方に陥らないよう心すべきと教えられますでしょうか。

**「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る」(23)**

**「神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない」(24)**

・今月の中心箇所として冒頭に記した一節、「霊と真理をもって」(23、24)ということも、これら一連の事柄と関係しています。

・サマリアの女性との対話がクライマックスを迎えた そのとき、イエスは言われました。「しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって 父を礼拝する時が来る。・・・神は霊である。だから



シカルの町：ゲリジム山とエバル山に挟まれて  
(日本聖書協会ホームページより)

ら、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない」(23、24)。

・「霊」(23、24)とは旧約聖書のヘブライ語で「ルアハ」、新約聖書のギリシア語で「プネウマ (πνεῦμα)」と言いますが、そもそもは「空気の動き」を意味し、そこから「風」を、さらには「気」や「息」を表わすようになりました。そのようにして、つまりは「生命あるものを生かすもの」を意味すること。そこにポイントがあると言えるでしょう。

・一方、「真理」(23、24)とは「事実」であり、「真実」であり、さらにはそれらについての「正しい理解」と言えます。

・ただし、お気づきのことと思いますが、この一節は一つ前の『口語訳聖書』では、「霊とまこととをもって」と訳されていました。その又前の『文語訳聖書』でも、「霊と眞(まこと)とをもて」でした。

・それが現行の『新共同訳聖書』では「霊と真理をもって」と訳出されているわけですが、「まこと」と「真理」とではやはり、ニュアンスが違ってくるのではないのでしょうか。特に日本人である私たちにとって「まこと」という言葉には独特なニュアンスが伴いますので・・・。

・ちなみに、いわゆる『岩波訳聖書』と呼ばれる翻訳は新共同訳と同様、「霊と真理」と表現しています。

・事はそもそも、元々のギリシア語 (<sup>アレーセイアー(イ)</sup>ἀληθεία < <sup>アレーセイア</sup>ἀλήθεια) に両方の意味があるためです。

・皆さんははたして、どちらを選ばれるでしょうか。そして、その理由は？ どちらを採るかによって、聞こえてくるメッセージに違いが出てくるように思われるのですが・・・。

・さらに見るなら、「霊と真理をもって」と記されているその部分が元々のギリシア語ではただ一つの前置詞 (<sup>エン</sup>ἐν) で一つに括られていることが分かります (<sup>エン</sup>ἐν <sup>プネウマティ</sup>πνεύματι <sup>カイ</sup>καὶ <sup>アレーセイアー(イ)</sup>ἀληθείᾳ)。これはいったい、何を意味しているのか。もう一つ、考えさせられるところです。

・そして結局、イエスの言われる「まことの礼拝」(23)とはどんな礼拝なのか。また、そこに臨む礼拝者の在り方とはどのようにあるべきなのか。そこに思いを寄せたいと思います。

・以下、留意すべき幾つかの箇所を見てみましょう。

### 「救いはユダヤ人から来るからだ」(22)

・イエスが「(救いは)ユダヤ人から(来る)」と言われたのはもちろん、サマリア人<sup>じん</sup>に対する差別意識からではありません。

・そうではなく、「救いはユダヤ人の中から出るメシアから来る」と、(旧約)聖書の預言を言われたのでした。

・私たちがここから教えられることは、何でしょうか。

・そして、ユダヤ人の中から出るメシア(救い主)とはいったい、誰のことなのでしょう。

### 「この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る」(21)

・「この山でもエルサレムでもない所で・・・」とはすなわち、サマリアにあるゲリジム山の神殿で

あろうと エルサレムにあるシオンの丘の神殿であろうと、そうしたことは関係なく・・・ということですが。

・このように言うことで、イエスは礼拝について本質的に何を言わんとされたのでしょうか。

「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。

その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます」(25)

・一連のやり取りを通し、サマリアの女性はイエスの内に尋常でない何かを感じ取ったのでしょうか。そんな彼女の口から出たのが、この言葉でした。

・「メシア」とは そもそもは「(聖職就任の儀式として) 油を注がれた者」を意味したヘブライ語の呼称で、それが「救い主」を意味するようにもなったもの。

・一方、「キリスト」は、そのメシアの「救い主」としての用法のギリシア語表現です。

・つまり、「ギリシア語で『キリスト』と呼ばれる『メシア』が、すなわち『救い主』が来られることは・・・」との意です。

・興味深いのは、直接・間接にイエスを想定した サマリアの女性の言い方の変化です。

①19 節では「あなたは預言者だとお見受けします」と言っていた彼女が

②この 25 節では、「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています」と、その表現を微妙に変えています。

・この変化は彼女の内面の何を暗示しているのでしょうか。彼女はイエスの中に何を感じ取り、その内に何を期待して 言葉を変えたのでしょうか。

「それは、あなたと話をしているこのわたしである」(26)

・言葉を変えて、イエスに返答をしたサマリアの女性。それに応えて、いま一度 応答されたイエスの言葉がこれでした。

・「それ」とはすなわち、サマリアの女性が直前に言った「キリストと呼ばれるメシア (救い主)」(25) のことです。

・だとしたら、これはイエスの明確な自己表明と言えはしないでしょうか。

・今月の箇所は、イエスの この驚くべき言葉で終わっています。「それは・・・このわたしである」と。

・しかも、これに先立って (23 節で)、

「今がその時である」(23)

と、イエスはそうも言っておられます。

・「今」とは、イエスが来られた その今であり、

・「その時」とは、「まことの礼拝」(23) が始まる その時です。

・私たちにとって、それはいったい 何を意味しているのでしょうか。サマリアの女性が

そこへと導かれつつあった しかるべき礼拝のかぎはこのあたりにあるように思われます。

.....

本来の礼拝とはいったい、どのようなものを言うのでしょうか。

その礼拝に向かう在り方とは どのようなものか。

そして そもそも、イエス・キリストとは 自分にとってどんなお方なのか。

礼拝という大切な問題をめぐって、聖書に聴きつつ、

御一緒に思いをめぐらせてみたいと思います。